

天地

ネットワーク テーブル 514号

天地シニアネットワーク 2020.12.16

TENTI TODAY			1
会員の広場			
随想	英会話の楽しみ(12) 主語について	伊那 闊歩	2
論考	中国人から見た日本人の言語表現理(20) 外来語を使って高級感を出したい心理(2)	愈 彭年	4
回顧	ピアウイストックでのウオッカ事件	森永 善彦	6
随想	読書感想「大分断」を読んで	臺 一郎	7
回顧	バブル期・証券業界真っ只中	津田 孚人	9
講演会	「新三木会」		11
事務局			11

TENTI TODAY

コロナに始まりコロナで終わった1年とはならず、新型コロナウイルスとの戦いは来年に持ち越されること確実なようです。来年の東京オリンピック、聖火リレーの準備も進んでいるようですが、コロナ対策が後手後手に回っている現状では、単なる行事となりそうです。日本社会の体力、体質は、緊急事態に対応できないとみるのは行き過ぎでしょうか。

コロナ対策と経済対策、両方を上手くやるしてきましたが、両方ともダメという恐れも出てきました。リーダー不在の集団指導では、緊急時対応は無理です。経験豊かで誰でもが納得する先見の明のあるリーダーが出て、その政策の下に一致団結して行動する・・・難しいでしょう。地域主義、個人主義にしがみついた日本、一寸先は暗闇です。

日本株が上昇しています。米国株の上昇につれてとか、社会、経済の変革を先読みしているとか、いろいろな見方があります。一方で、日銀の大量買いで株価は上昇しているが、いずれ売却するのを考えるとリスクが大きいと心配する方もいる。当局がどのように考えているのか不明ですが、先は当然考えているはず。金融機関は保有株をどんどん売り手すきです。事業会社も持ち合い解消で、潤沢な資金がありそうです。個人の預金勘定も膨大です。かつて株式暴落の時、共同証券という株式保有会社を、官民でつくって市場に出回る大量の株を吸い上げ、凍結したことがありました。いざとなれば、またありそうです。さらに、戦略的な企業の国有化、などもでてくるのではないのでしょうか。

会員の広場

英会話の楽しみ(12)

伊那 闊歩

12.主語について

1.英語の主語

文章は通常、主語と述語があって成り立つ。日本語では昔から会話でしばしば主語が省かれる。主語をはぶくほうが自然なのだ。英語は通常主語を省かない。英米人は伝統的に文章に主語がないと落ち着かないのだ。

たとえば、次の文章は、シャーロック・ホームズが、ボヘミア王とアイリーン・アドラーが親密であったことを示す証拠写真のありかを確かめるためにアドラーの屋敷に忍び込み、一方ワトソン博士が発煙筒を屋敷に投げ込んで群衆をかく乱し首尾よく屋敷から退出する場面：

“You did very well, Doctor,” he finally said. (You)

「すばらしかったよ、ワトソン先生」とホームズは口を開いた。

“Did you get the picture?” (you) 「写真は手にはいった？」

“No, but I know where it is” (I, it) 「いや、でも場所はわかった」

“How did you do it” (you) 「どうやって？」

“It was very simple. . . .” (It) 「ごく簡単なことだよ。…」

[ボヘミアの醜聞、井上久美訳]

英文とその日本語訳とを較べてみれば一目瞭然、英文の主語(You,I,it など)がことごとく日本語に訳されていないのだ。にもかかわらず英文もその日本語訳も言っている内容は同じである。これほど文章の構造がちがっていても内容は同じということは、考えてみれば不思議なことだ。英語は主語にこだわるが、日本語は述語があれば事足りるのだ。

これを逆に考えてみよう。英語になれていない日本人の頭のなかには、この日本語訳のように、まずは主語なしの文章が浮かんでいる。そこで咄嗟に口をついて出てくる英文は、いきなり述語や目的語から話しはじめて、しばしば混乱に陥ることになる。はじめに主語と動詞をはっきり言う習慣をつけることが英語の場合何より重要だ。

2. There is/are 構文

主語がひとつだけならまあ普通だが、一つの文章の中に主語がふたつあったとしたらどうだろうか。英語にはそのような構文があるのだ。その代表例が[存在文]としてよく知られている there is/are 構文なのである。たとえば次の文章：

There is a vase on the table. (テーブルの上に花瓶がある)

において There は文法上の主語の位置にあるが、意味上の主語は a vase である。There is は「ある」というだけで「そこにある」という意味はもはやない。つまり一つの文章の中に形式的な主語と意味上の主語と、主語がふたつあるというわけだ。この構文は意味上の主語によって相手に新しい情報を伝えるものとされているので、意味上の主語は相手がすでに知っているものであってはならない。この文章では a vase をはじめて見たのであって、相手がよく知っている the vase ではない。相手

がよく知っている人名なども意味上の主語にならないのが原則だ。たとえば 相手もよく知る Naomi(人名)を公園で見かけたとして There was Naomi in the park. というのはおかしいのだ。

こういうわけで意味上の主語には不定冠詞のついた普通名詞、抽象名詞、不定限定詞(some, somebody, any, no, nothing などなど)があてられる。この構文はすべての時制で使われ便利である。少し例文を書き出してみよう:

There is a lot of noise in the street. (街路はたいへんな騒音だ)

How many people are there in the spacecraft? (宇宙船の中には何人いるのですか)

There are some people outside. (外には幾人かの人があります)

Is there anything the matter? (なにか問題あるの)

Once upon a time there were three wicked sisters. (昔々三人の意地悪な姉妹がいました)

There have been several earthquakes this year. (今年は地震が数回あった)

There has been a resurgence of infections in Japan. (日本では感染拡大が再燃している)

There will be no school tomorrow. (あした学校は休みでしょう)

For there to be life, there must be air and water.

(生命が存在するためには、空気と水がなければならない)(*2)

Then God said, "Let there be light"; and there was light.

(神光あれと言給ひければ光ありき) [旧約聖書:創世記第 1 章]

次の文章は Vice President-elect Kamara Harris の victory speech 中の一節である。文中 it は Protecting our democracy (われわれの民主主義を守ること)を意味する:

There is joy in it and there is progress. Because 'We the People' have the power to build a better future.

(そこには喜びがあり進歩がある。なぜなら、われわれ国民はより良い未来を建設する力を持っているからです)

There's (= There is) は口癖のようになっていてインフォーマルな会話では **There's some grapes in the fridge, if you're still hungry.** (まだお腹がすいていたら、冷蔵庫の中にブドウがいくらかあるよ)

のように意味上の主語が複数でも **There's** を自由に使いこなす(*1)。これがさらに呼びかけのようになって「おお、いい子だ!」という意味で慣用的に

There's a good boy (girl, dog, cat)! という(*3)。

there is/are 構文の **is/are** がいろいろな自動詞、たとえば **seem, happen, tend, live, remain, enter, follow, ...** などに置き換わった文章も多く、この構文による表現の幅がますます広がる。たとえば

In a small town in Italy there once lived a poor carpenter. (昔イタリアの小さな町にひとりの貧しい大工が住んでいました)

There remains nothing more to be done. (なすべきことはもはや何も残っていない)

Suddenly there appeared before him the ghost of his father.(突然、彼の前に父親の亡霊が現れた)

There is/are 構文のほかに Here is/are 構文がある。Here は話者のすぐ手のとどくあたりにあるものを「ここに」と指示するときにつかうので、たとえば手品師が帽子を手にとって Here is a hat.などという。大学の講義で、先生が教科書を手にとって Here is an example. という。

また、ジョン・アップダイクに Here comes the Maples. (メイプル夫妻登場)という短編があるが、Here comes the train.(列車がきたよ)など自分に近づいてくるものに対しては Here だが、自分から遠のいていくものにたいしては、There goes the bus.という。There is/are にはただ「ある」という意味しかないので、Here is a book. ではなく There is a book here. ということもあるようだが、自分と book との距離感が微妙である。

「ここにあるよ」と言いたいとき Here you are.(はいあなた) または Here it is.(はいこれ)というが、米国では There you go.(よっしゃ、もってけ)ともいう。There you are! は「それご覧(広島弁では、あれ見んさい!)」と人をなじるときに使われ

There you are! Didn't I say this would happen? (あれ見んさい! こげなことになる言わんかったかいの?)などという。

ハンバーガーの店で注文するときには Is this for here, or to go? (ここで、それともお持ち帰りですか?)と聞かれる。お店で食べるときには For here, please.「お釣りですよ」は Here's your change. さらに慣用的な表現として

There is no telling what will happen next. (There is no ~ ing 構文)
(次に何が起こるかだれにもわからない)

They say there's going to be a bus strike next week.

(バスのストが来週ありそうだという話だ) (there's going to be 構文)
などがある(*2)。

出典

(*1) M. Swan: Practical English Usage (Oxford)

(*2) 江川泰一郎「英文法解説」(金子書房)

(*3)Oxford Advanced Learner's Dictionary

中国人から見た日本人の言語表現心理(20)

俞彭年

言語表現心理(四)

外来語を使って高級感を出したい心理-その2

いまに至っても海外ブランド品ということだけでもありがたがる日本人がかなりいる。このような人たちの心理と外来語使用心理とに一脈通じるものがあるようだ。外来語、特に最新の外来語の多数使用によって「高級感」や「新鮮感」や「舶来感」などを出そうとする心理だ。これは欧米先進文明にあこがれてできた「欧米語崇拜」心理の表れであろう。

この点、中国はかなり保守的であり、いまだに「翻訳漢語」に拘っているようだ。原因のひとつとして新中国成立以来の「反崇洋媚外」（反外国崇拜、反外国追従）思想教育が挙げられる。

外国崇拜、外国追従の典型的な例として批判された有名な言葉「外国の月は中国のより丸い」のがあった。時の政治的必要であったが、いまから見れば行き過ぎだ。このため改革・開放政策を実施する前までは外国文化、特に近現代の欧米文化との接触までがタブー視されるようになってしまった。

しかし現在は近代化により外国先進文明の吸収をはっきりと打ち出してきた。そのため外来語と「翻訳漢語」の分野にも変化が出てきた。けれども、主流はやはり「翻訳漢語」だ。

たとえば、「テレビ」は「**电视**」、「インフラ」は「**基础设施**」、「インフレ」は「**通货膨胀**」、デフレは「**通货紧缩**」、「マクロ」は「**宏观**」、「グローバルゼーション」は「**全球化**」、「パートナーシップ」は「**伙伴关系**」、「ダンピング」は「**倾销**」、「ブランド」は「**商品牌子**」、「インタビュー」は「**采访**」、「コンサート」は「**音乐会、演奏会**」、「ニュースキャスター」は「**新闻报导員**」、「エアバス」は「**空中客车**」、「アルカイダ」は「**基地组织**」となっている。

意味に基づいてついてくる「翻訳漢語」でなく、音に基づいて適当なよい意味をつける訳語（言い換え？）もある。たとえば、「コカ・コーラ」は「**可口可乐**」、「（乗用車の）ベンツ」は「**奔驰**」、「サントリー」は「**三得利**」、「カネボウ」は「**佳爾宝**」、「キャノン」は「**佳能**」、「ロッテ」は「**乐天**」、「ゼロックス」は「**施乐**」、「マール・ボロ」は「**万宝路**」、「プジョー」は「**标**」などがある。

そのうち「**可口可乐**（「口に合って楽しめる」という意味）、「**奔驰**（「疾走する」という意味）、「**三得利**（「三つの利を得る」という意味）は名訳とされて有名だ。それから「ミニスカート」の訳語「**迷你裙**」もよくほめられる。「迷你」は「ミニ」の音訳で「あなたを迷わす」という意味であり、「裙」は「スカート」の「翻訳漢語」であり、全体として「あなたを迷わすスカート」という意味となる。イメージを彷彿とさせ、面白い訳語だ。

当然、適当な良い意味がつけられず、ただの音訳になったものもある。これはまさに日本語のカタカナ外来語と同じだが、中国では外国の会社名や商品名に多い。

たとえば、「クライスラー」は「**克莱斯勒**」、「ボーイング」は「**波音**」、「ブロードウェイ」は「**百老汇**」、「ディズニー」は「**迪斯尼**」、「ダウ・ジョーンズ」は「**道琼斯**」、「ダグラス」は「**道格拉斯**」、「マクドナルド」は「**麦当劳**」、「ケンタッキー」は「**肯德基**」、「（乗用車）サンタナ」は「**桑塔纳**」、「シャープ」は「**夏普**」、「カシオ」は「**卡西欧**」、「シャングリラ」は「**香格里拉**」となっている。

音訳と意味訳の組み合わせもある。たとえば、「ケンタッキー・フライドチキン」は「**肯德基**炸鸡」「インターネット」は「**因特网**」、「デビス・カップ」は「**戴维斯杯**」、「ディズニーランド」は「**迪斯尼乐园**」となる。意味訳と音訳が併存するものもある。たとえば「タクシー」は「**出租汽车**」と「**的士**」だ。

中国語にとっての難題は日本の仮名書きの人名と地名をどうするかだろう。たとえば、「田中めぐみ」の「めぐみ」は意味で「恵」とするのか、音で「美格米」とするのか。当人がわざわざ仮名書きにしているからには「恵」ではまずいと思われるが、そうかと言って「美格米」では名前らしくない。

新しくできた「さいたま市」も同じで、わざわざ仮名書きにしているため、中国語訳は「埼玉市」でよいのか、それとも「薩伊驛摩市」にするのか。中国人にとっては「埼玉市」のほうがわかりやすいのだが、日本側はどう考えるだろうか。北海道のニセコ町もそうだ。中国上海市にある出版社から「ニセコ」はどう訳したらよいかと聞かれたことがある。音訳として「尼色柯」しかないのではないかと答えた。

ビアウイストックでのウオッカ事件

森永善彦

またポーランドでの思い出をお届けします。

ポーランドのワルシャワで1996年6月から2000年12月まで4年半、トヨタの輸入卸売をする会社で働いていました。ポーランドに赴任して車販売の課題は、車をお客に実際に売る販売店（ディーラー）の強化にあると考え、時間が有ればポーランド内のディーラー訪問をしてこの目で（現地現物）ディーラーの実態を見て今後の課題を見つけようと思いました。そのディーラー訪問の時に経験したエピソードです。

ポーランドの北東にビアウイストックと言う町がありました。車で3時間半位掛かりましたが、その時に私の補佐役の藤本君を連れてのビアウイストックディーラーを訪問しました。小さなディーラーでショールーム擬きにポーランドで扱っていないレクサス車が1台置いてありました。ディーラーの店舗は小さく設備も十分でなく大丈夫かなーと思いつつ店舗を見て回りました。

施設見学が一段落してディーラーのオーナー夫妻と懇談をする事になりました。用意された席に座るとオーナーが“飲み物は何が良いか、ウオッカかブランディーか？”と聞いてきました。ポーランドでは客をもてなす為に朝からアルコール度の強い酒類を出します。気の利いたところはそれにカナッペ等の軽食も付いてきます。

藤本君と顔を見合わせて“どうする”と話し合いました。この時は飲み物のみのオファーでした。折角のご好意なのでポーランドのウオッカ、ズブロフスカを頂く事にしました。仕事の話をしていると、その内小さなグラスにいれたウオッカが私達の前に置かれました。話しをしながら一口飲みました。

ウオッカはアルコール度数が高いのでそれなりに気を付けて飲みました。口に入れると全くアルコールの味がせず、水みたいでした。おかしいなと思い藤本君を見ると、ウオッカを口にしながら一生懸命オーナーとの話に没頭しています。彼に“おい藤本君このウオッカは変じゃないか、味がしないぞ”と言うと、彼は今まで飲んでいた癖に“あっそう言えばウオッカの味がしない”と言いました。

それで通訳代わりに連れて来ていたフィールドマンにそれを伝えました。彼は運転手なので飲んでいませんでしたが、我々の言った事をオーナーに伝えました。チェックすると単なる水である事が判明しました。

ディーラーの従業員の誰かが、ディーラーのキッチンの冷蔵庫のウオッカをこっそり飲んで、代わりに水を入れたようでした。オーナーが慌てふためきこれからウオッカを買

いに行かせると言いましたが、元々ウオッカを期待していたわけでは無いので、結構だと断りました。後で聞くと藤本君はディーラー訪問で、オーナーとの話で緊張していて、全く味がしないのに気付かなかったそうです。

全般的に経営がしっかりしていないと言うディーラー訪問の感想でした。その後色々有りこのディーラーとの契約を解除しました。決してウオッカの恨みのせいでは有りません。

なお藤本君は私より 11 歳若くトヨタとの合弁相手の日商岩井から出向していました。日商岩井はその後ニチメンと合併し双日となり、藤本君は一昨年双日の社長に抜擢され、大いに張り切って社長業に励んでいるようです。

以上

2020 年 12 月 8 日

読書感想「大分断」を読んで

臺 一郎

しばしば欧州最高の知性とまで言われるエマニュエル・トッドの「大分断」(PHP 新書)を読んだので、特に印象に残った点などを簡単に紹介します。

著者のエマニュエル・トッドはフランス人。現在 69 歳の歴史家、文化人類学者、人口学者です。ソルボンヌ大学卒業後、英国のケンブリッジ大学で博士号をとっています。主たる著書は『経済幻想』、『「ドイツ帝国」が世界を破滅させる』、『グローバリズム以後』など多数です。ソ連邦の崩壊、アラブの春、トランプ大統領の誕生、英国の EU 離脱などを予想し、当てたことでも知られています。

さて、最新の著書『大分断』でトッドが繰り返し強調しているのは、近年における教育は社会の格差をむしろ拡大し民主主義を破壊しているという点です。彼は著書の中で、現代における教育、とりわけ高等教育は本来『精神的な開放』を目的としていた筈なのに、今や社会的階級を再生産し格差を拡大させる強力な要因になってしまったと強調し、さらに、高等教育の階層化がエリートと大衆の分断と対立を招きポピュリズムを生んでいると断じます。

彼が著書の中で強調している社会的事象は、我々が普段の気楽な世間話ネタとして友人と語らうようなことではありません。正直筆者の知的能力では完全に理解するのに荷が重いテーマではあります。けれども彼の本の中にはそれとは別に「あっ、そういう考え方や見方もあるんだ」と気づかされる指摘や見解や助言もあるので、ここではもっぱらそちらを紹介したいと思います。

彼の日本人に対するもっとも刺激的な提案は、「日本は核武装したら良い」というものです。彼はまず、日本は稼働に伴い有毒な放射性廃棄物を長期にわたり排出し続け、大地震の如き激甚災害では福島第一原発で起きた事故のように原子炉が暴走し、あわや東日本壊滅といった事態も懸念される原子力発電こそ止めるべきであると指摘します。その上で、けれども戦争や仮想敵国等による領土侵攻の誘惑を強力に抑止し、ほぼ恒久的に平和を維持しうる核兵器はむしろ持つべきであると言う

のです。

ちなみにトッドによれば、フランス人にとって核兵器とは、ロシアのみならず隣国ドイツ等によるフランスに対する領土的野心や潜在的侵攻誘惑をほぼ恒久的に抑止・断念させるための最も有効な手段であり、戦争のための道具というよりは平和を維持するための道具だということです。

一方、日本人にとって核兵器とは最も唾棄すべき大量殺戮兵器であり、平和を維持するための手段や道具であるという認識はほぼ皆無でしょう。これは我が国が世界で唯一の被爆国であり、第二次大戦の無条件敗戦国であり、戦争放棄を謳った憲法 9 条をいただく国家であるからと思われまます。

けれどもトッドの言うことにも一理はあると思うのです。核兵器を持たずに仮想敵国の領土的な野心を断念・放棄させ、戦争を抑止するには多数の戦闘機や軍艦、戦車やミサイル、そして大勢の兵隊からなる大規模な軍隊が必要となります。今現在の日本の国防政策や安全保障政策は概ねその方向で進められているようにも思えます。ですが、もし核兵器があれば、それほど大規模な軍事力は必要なくなるのかもしれないという理屈です。

とは言え、日本人にとって核兵器の保有は国民感情的に到底受け入れられないタブーと言って良く、故に少なくとも第二次大戦の敗戦から 100 年以上を経た、21 世紀の半ば頃までは実現しないだろうと私は思っています。

さて、トッドの提案や助言には核兵器問題以外にも傾聴に値することがありますので、そのうちの一つを紹介します。

それは「日本はもう少し無秩序を受け入れよ」という助言です。確かに、家庭ゴミの分別にしても、バスや電車の運行時刻管理にしても、感染症対策としてのマスクの着用にしても、日本人は一旦規則や新たなマナーが定着すれば、完璧に厳密にそれを守る国民性があります。トッドはその完璧性、厳密性がこれまでは日本国の大きな強みであり、経済発展の要因となったけれど、今後はむしろ国力衰退の要因になると警鐘を鳴らすのです。

日本は人口の少子高齢化が止まらないために、国内人口は確実に減少が続き、経済力も国防力も衰退していきます。それに歯止めをかけるには海外からの移民を受け入れるしかないというトッドは強調します。そして日本は東南アジアや欧州からの移民の受け入れが良いのではと薦めます。移民の受け入れは、我が国の社会秩序を少しばかり乱すかもしれませんが、人口は確実に増え、将来にわたって経済力等の国力や先進国としての地位を保てるだろうというわけです。

確かに、人口問題に限らず、少々の無秩序を受け入れること、すなわち完璧主義、純血主義、原理主義的な日本社会の是正というか、日本人の国民性を見直しと多少の改善は 21 世紀日本の重要なテーマなのかもしれません。

＜回顧＞ 第二回

バブル期・証券業界・真っただ中(1)

津田 孚人

経緯は前回の通りですが、昭和58年(1983年)4月、更栄証券(のちのセンチユリー証券)へ出向、＜保険屋＞から＜株屋＞に転じました。当時の常識では、非営業部門でなく営業部門へというのは、かなり異例で珍しいこと、第一生命へ常時出入りしていた証券マンからは、ほとんど無視された。同業者になるのですから当然だったかもしれません。

そのとき、当方もまったく自信がなかったわけではない。入社して10年、財務部・証券部門に在籍しましたので、証券マンとの付き合いは長く、また株式、債券についての知識はかなりあった。売買の事務的な流れ、処理は理解し、何よりも、投資の基本である＜利回り＞で鍛えられたのが大きな強みになっていた。

＜利回り＞というのは投資の基本、証券投資では必要な知識です。当時の証券会社、手数料収入が大きいので営業の中心はもっぱら株式でした。債券は、国債などの発行が増え、顧客開拓が必要でしたが、商品としての知識が十分でないので、どちらかという敬遠していました。したがって、債券売買を理解し、こなせる人は、多くはありませんでした。

このように＜利回り＞についての経験知識があったので、株式も、債券も取り扱えるという自信から、中小証券の証券営業マンには負けない、とっていました。

余談ですが、当時の利息、利回りなどがどのような、状況下にあったか、少し触れてみます。

企業への融資は、利息は＜日歩＞計算でした。例えば、融資契約書には、融資額・5億円、金利・日歩2銭5厘、期間・2年間、担保・銀行保証といった文言が並びました。一方、証券では、株式の配当は、パーセント表示もありましたが、配当は、年1割、年2割5分のように言われました。債券については、利子はパーセント表示でした。投融資を論じるときには、日歩をパーセントに、あるいは、パーセントを日歩に、それぞれ転換して比較しました。

新規国債の大口引受先であった生保、保有する国債はほとんど金庫に眠っていましたので、これを有効活用しようと貸付けるようになりました。貸し賃は、日歩計算でしたが、途中から売買方式に変わりました。例えば、7.5パーセントの利息札が付いた国債10億円を、3か月で買い戻す条件で、年利回り5.5パーセントで売却する、買い戻し単価は？、金額は？、などという計算をしょっちゅうしていました。電卓のない時代、そろばんと機械式計算機を使って計算していたのですから大変でした。

このような経験を持ったうえでの証券会社出向、小証券ですから、収益を上げるのに手っ取り早いのは個人投資家を増やすこと、そして売買を増やすことでした。日本国中が、株式投資熱中した時代、株式投資に興味をもつ個人は大勢いましたが、株が上がって当たり前、下がると必ず文句をいう、という行儀の悪い個人投資家も多くいましたので、個人の株式投資には、かかわらないと決め法人営業に特化することにしました。

それでも、「お宅に協力しようと、営業マンに自分だけでなく友人の資金まで預けていたら、大穴があいた。どうしてくれる」とすぐまれたり、「部下が信用取引で担保不足で困っている。何とかならないか」という相談を受けたり、身近の個人の話が持ち

込まれました。個人にはノータッチと聞き流すだけで、深入りはしませんでした。普通のサラリーマンが、株式にのめりこんでいるのを見ると、株はまさしく魔物でした。

さて、赴任して法人営業を始めて最初の壁は、前に触れたように、多くの企業で、銀行、証券、保険と垣根があることでした。その中の取引シェアが大体決まっているので、たとえ生保取引がメインでも、証券取引に加わるのは大変難しかったのです。

そこで、企業が増資や、無償交付で発生した端数株を、株主から買取り請求があって単位株になると市場に売却する、という大手証券では数量が小さくてあまり興味を示さないという商いに目を向け法人営業のきっかけをとりあえず作っていきました。

出向2年目の昭和59年《1984年》に、会社は引き受け免許を取得、折よく、上場企業の時価発行（特に転換社債）が大流行していた時代でしたので、第一生命のコネを利用して多数の会社の引き受けシンジケートに加わることができた。東奔西走した当時が懐かしい。企業の転換社債発行計画が出ると、企業を担当する第一生命の担当者に紹介を頼み、企業訪問して「最低単位で結構です」とお願いするというパターン。朝、新聞で知って直ぐそのまま大阪、福岡などへ直行というようなことがしばしばあった。ほとんどが、最小単位の0.1パーセントだったが、通常であれば取引のない新顔が、入るのは大変な時間がかかる、証券界でも大いに注目された。

この年、更栄証券という由緒ある社名を新しくすることになり、社内公募。いくつか候補がでましたが、直前になって前嶋副社長から、どうもしっくりしない、何かないかと聞かれたので、これからの新時代、センチュリー証券でいかがと話していたら、大蔵省に認可され、センチュリー証券誕生にいささか貢献したのも思い出に残る。

2年目に入って法人部も格好がつき始め、第一生命からの大口注文のほか、他の法人筋からの注文も出るように、自前の親密企業も出てきた。特に、上場して間もなかった、「セブンイレブン」と、端株の取り扱いから窓口での縁が深くなり、信託銀行でも株式売買に一番熱心だった住友信託銀行の年金資金運用部門の担当者から、「セブンイレブンの株はいつ買っても損をしないので、注目している。情報は、センチュリーが一番」と評価してくれ、少しずつだが注文が出始めた。

セブンイレブンが店舗オーナーからの急な引き取り依頼で、頭を抱えていた時に、住信からの注文が出て、担当者から大感謝を受けるというような事も懐かしい思い出。さらに親会社のイトーヨーカドーとも縁ができ、超優良企業との取引成功は、会社の格上げにつながった。

以後、証券営業にまつわるエピソードが幾つもあります。またバブル崩壊、株価暴落、その直前まで法人営業マンとして前線にいたので山一証券の崩壊も垣間見ました。記憶も定かでなくなりましたが、次回思い出をさらに続けることにします。

文化講座・講演会

新三木会

新三木会々報の送信

12-1 通産第28号

音楽： 枯葉 イヴ・モンタン

I 新三木会の10年 則松久夫（新三木会代表幹事 昭39卒）

II 読書ノート 川面 忠男（早稲田大学 政経学部 39卒 元日本経済新聞社）

(1) 森鷗外 『渋江抽斎』

(2) 三浦孝一先生と三浦環

新三木会代表幹事 則松久夫

(Email) shinsanmokukai@gmail.com

事務局

<投稿>を歓迎します。

天地シニアネットワーク・テーブル・514号

発行：2020年12月16日

天地シニアネットワーク事務局（津田 孚人）

〒116-0001 荒川区町屋3-2-

1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX・03-3819-7651